地　域　経　済

REGIONAL ECONOMY

第５号

２００１.４

和歌山地域経済研究機構

〈構成〉和歌山大学経済学部
和歌山商工会議所
(財)和歌山社会経済研究所

〒640-8567 **和歌山市西汀丁３６**
和歌山商工会議所内

TEL.073-422-1111
FAX.073-433-0543

目　　次

＜理事長のご挨拶＞ 地域活性化のための研究機構の役割 …… 1

＜特別寄稿＞ ホスピタリティー …… 2

平成 12 年度事業報告

1．自主研究「ベンチャービジネス事例研究」 …… 5

2．自主研究「若者に魅力ある都市創造、都市環境づくりについて」 …… 6

3．研究会「物流戦略研究会」 …… 8

4．研究会「都市創造戦略研究会」 …… 9

5．研究会「観光戦略研究会」 …… 10

平成 13 年度事業計画 …… 11

研究成果一覧 …… 12

理事会メンバー …… 12

＜理事長のご挨拶＞

地域活性化のための研究機構の役割

和歌山地域経済研究機構
理事長　　小　田　　章

「失われた 10 年」という言葉が囁かれている。バブルがはじけ、わが国の経済は一瞬のうちに奈落の底に墜ちてしまった。にもかかわらず、そのことへの認識が甘く、これまで脱出するための策を講じてこなかった。政府は、やっとそのことに気づき、いま右往左往している。こうした政府の経済・景気対策の不十分さが、日本経済はもちろん地方経済の危機をもたらす結果となった。中央中心の政治・経済体制の弊害がもろに出たと言えよう。もちろん、地方も中央への依存心が強く、自らの危機を自らの手で克服しようとする意識に欠けていたのであるが。

しかし、今さら誰が悪い、何が悪いと言っても始まらない。いま、重要なことは一日も早く、この袋小路から脱出し、経済の健康を回復することであろう。

では、如何にすればいいのか。二つの方法が挙げられよう。一つは、消費者マインドの改善、二つは、危機意識の醸成である。前者は、消費者の購買意欲を高めることである。売り手が良好な製品やサービスを提供することができれば、買い手の購買意欲はかき立てられる。例えば、携帯電話、ユニクロ、ＵＳＪがその良い例である。良いもの、満足できるものには消費意欲は高まるのである。後者は、本当に景気が悪いという状況を国民がもっとｼﾋﾞｱに認識すべきと言うことである。危機意識がなく、何とかなるのではないかと言う認識があれば、人は無理して行動を起こさないであろう。この二つのことが和歌山において顕在化するかどうか、つまり顕在化させることができるかどうかである。そのためには、産官学が協力してそのための施策を展開することが必要である。

和歌山地域経済研究機構は、これまで地域活性化のために種々の研究を行ってきたが、具体的な施策の展開という点では十分であったとは言えない。今後は、地域の自立的活性化のための具体的な提言を行うのが与えられた使命であると認識し、一層の努力を図り、地域発展のために微力を尽くして行きたいと考えている。

＜特 別 寄 稿＞

ホスピタリティー

西日本旅客鉄道株式会社
執行役員和歌山支社長　森 長 勝 朗

「例えば和歌山の地域経済の展望は？」と聞かれれば，私はやはり観光というキーワード抜きには語れません。当地は海・山あり・温泉ありと自然は言うに及ばず、歴史的文化財には事欠かない処です。しかも京阪神から比較的近接していることもあり、ご承知のように白浜をはじめ南紀エリアはかつて新婚旅行のメッカとして大変賑わったものです。ただ、これは私の父母の時代のことです。今は昔、黙っていても人々が集まる時代は過去のこと。そう考えますと、今、まさに次代の和歌山を展望するときではないでしょうか。腰を現実に据え、和歌山のもつ魅力・和歌山にしかない良さを能動的にアピールしていかなければならないと、いつになく強く思い始めているのです。

時代はあらゆるものを飲み込んで IT の波が押し寄せています。かつては駅と列車の間に駅員の介在が不可欠でした。しかし、IT 時代を迎え、家に居ながらにして切符の予約や決済まで完了することとなり、結果として「個人対列車」、あるいはもっとダイレクトに「個人対座席」の関係へと進化し、今までのように駅や駅員が介在する余地がなくなっていくことが予見されます。

駅は結果的に、周辺地域の拠点として列車に関わること以外の役割を付加していく駅と、単なる停車場の二極に分化していくことになるでしょう。

前者に関しては、かつて駅が地域の人の集い行き交う場所であったという歴史に逆らうことなく、周辺地域のコミュニティーの場として発展させねばならないでしょう。さらに付加して、そこは和歌山観光の前線基地として情報発信機能をも持つべきでしょう。ここに立ち寄れば、そこから始まる旅のプロローグが色鮮やかに展開されるかのような、そんな情報を提供できるところでありたい、と考えています。

先にも申し上げたとおり、和歌山には集客資源は驚くほ

ど多くあります。個々についてはそれぞれ魅力があり、僅かに旬を過ぎたものも含め、今もなお潜在力を失わずにいるわけですが、旅行というものに対して、かつてほどの『非日常』の意味合いが褪せてきたことは間違いありません。気軽に何処へも出かけられ、また求めるものがますます高まっていく今日を凝視しますと、個々がバラバラに光を放っていても人の心の琴線を揺るがすには遠く及ばないということが見えてきます。

人を動かす起動点となるためには、如何にすべきなのでしょうか？個々の光を更に磨くことと、光を束ねること以外に方法は見つかりません。

磨く：つまり観光地のブラッシュアップと資源の複合が実現されなければなりません。旅館に泊って帰るだけのパターンは過去のものとなっています。泊りが良く日帰りが悪いと思うことからも脱し、世の中の消費性向に合わせつつ、『潜在』のなかで今までとはもっと違う体験や『非日常』を提案し、プレゼンして、整えていかなければならないでしょう。和歌山ならではのいいものとその中にホスピタリティーをここかしこに感じさせること。この２つの価値をセットにして『喧伝』していかなければならないと、考えるのです。

束ねる：つまり観光地どうしのアライアンスの実現です。しかし、残念ながらこれに関して和歌山は十分でないと指摘されています。白浜が、勝浦が、熊野がそれぞれビジターの引き合いをしている場合ではありません。敵は和歌山県内にあらずなのです。訪れる人が順に周遊したくなるように観光地が手を取り合い、無いものを補完しあうようなコーポレートこそが、和歌山に求められていることではないでしょうか。また、観光に関与する全てのものが他に期待し待つのではなく、自らが目覚め動いていくべきではないでしょうか。

この内心の強い力をもってすれば、和歌山は 21 世紀においても色褪せず魅力を発信していくことができると確信するのです。その際、前述の拠点駅は満載の地域情報を発信し、その任を完遂しなければならないことになります。一昨年、和歌山の自然をテーマに南紀熊野体験博が開催されましたが、顕現という視点では、マイナーな感じが否め

ず、熊野の良さが十分伝わらなかったのではないかと思っています。もっとも１年という短期の博覧会ではいたしかたありませんが、熊博＝観光地化＝経済貢献と短絡的に期待し過ぎたのかも知れません。

奥熊野エリアは日本人のこころの故郷・原点なのです。その懐、奥行きも驚くほど深いものであるが故に、直ちに多くの来訪者があるべきだとの発想を控え、ゆっくりじっくりと魅力を訴えていくべきではなかったのでしょうか。奥熊野のみならず和歌山は、IT 化や極彩色・急角度で進む文明の渦の中で疲れ果てた人々の心を癒し、そして必ず人々が戻って来る場所であることに私は疑いをもちません。「奥熊野・勝浦・白浜に代表される和歌山のあらゆるものが有機的に結合することができれば」と、これが私の考える和歌山の魅力再編イメージなのです。

理想の話はこれくらいにして、旅行に携わる者として現実の世界に思いを馳せねばなりません。今、鉄道のシェアは狭まっています。しかし、誰でも何処へでもいつまでも自動車で動くでしょうか？答えは「No」です。少なくとも、自動車より鉄道は、地球に人にやさしいものです。一方、何分にも重装備の事業であるゆえ長期のスパンを描いてこの事業は進めなければならないのです。

旧来鉄道は観光にそして地元の足として温かく見守り、育てて頂いてきたわけで、採算のみ考え列車を走らせることだけに終始することはこのエリアを任されているものとしていささか短絡的との謗りを免れないかもしれません。ただ一方で、企業の論理も成立させながら進めることも私に与えられた使命と考えています。

同様にして、地域との連帯・地域発展への働きかけも私どもの欠かすことのできないもう一つの使命ではないかとも思うのです。

そう心に言い聞かせつつ、今後も新たな和歌山の姿を創ることと私ども社員の幸福をダブらせながら進んで行きたいと強く思っています。

平成 12 年度事業報告

1．自主研究

「ベンチャービジネス事例研究」

（財）和歌山社会経済研究所
研究部長　崎 山 頌 一

ここ数年、官民あげてベンチャービジネス振興が叫ばれている。

和歌山県においても「わかやま地域産業総合支援機構」（らいぽ）が創設され、産・官・学による総合的な支援体制が動き出している。

こうした中で、当機構では平成 12 年度の研究の 1 つとして「ベンチャービジネス事例研究」に取り組んでいる。

この研究は、県内のベンチャー企業を中心に 30 社程度を取り上げ、その企業の成長の過程や成功の要因等を調査し、ベンチャー企業が成功するための条件や経営の重要な要素を探ろうとするものである。

対象とする企業は、ベンチャーで成功した企業の他に、ベンチャー企業の範囲を広くとらまえ、業種転換や画期的な製品開発等により成功をおさめた企業及び創業後まもない SOHO 事業所など、業種、規模など様々な企業を取り上げることにした。色々な経営者の方々にお話しをお聞かせいただき、経営者自身の経営に対する姿勢とか、考え方、具体的な経営手法等を広く紹介し、今後、創業を考えている方や企業の経営者の方々に参考となるようなものに出来ればと考えている。

2．自主研究

「若者に魅力ある都市創造、都市環境づくりについて」

和歌山大学経済学部
教 授　乗 杉 澄 夫

本研究は平成 11 年度に自主研究「若者に魅力ある都市創造，都市環境づくりについて」として立ち上げられた。とはいえ，作業が本格的に開始されたのは平成 12 年 4 月であり，本報告は，この１年間に行われた研究調査活動の結果をまとめたものである。

和歌山県における人口動態の特徴は，総人口が横ばいか若干減少する中で，若者が県外に流出し，高齢者が増加していることにある。特に若者の県外流出は，和歌山県の活力の低下をもたらすだけに，深刻である。その原因として考えられるのは，和歌山県内に高等教育機関（大学）が少なく，とりわけ雇用機会が乏しいことである。したがって，若者の流出を防止し，移入を促進するためには，和歌山県内の雇用機会を増やすことが重要な課題となる。しかし，それだけでは十分とは言えない。若者がいずれの地域に雇用機会を求めるかが残っているからである。その選択には，企業の将来性だけでなく，生活の場としての魅力も作用するはずである。我々は，雇用機会の量や質だけでなく，若者に魅力ある街づくりを図る必要がある。

本研究は，こうした視点から，和歌山大学経済学部に在籍する学生を対象にアンケート調査を行い，若者に魅力ある街がどのようなものであり，そのために何が必要であるのかを探ることにした。そして，和歌山市が若者にとって住み良い街なのかどうか，若者が将来どのような所に住みたいと考えているのか，若者のレジャー行動や海洋レジャーへの関心がどのようなものであるのかを調査した。

本研究はまた，海外で魅力ある街づくりを推進している地域を視察し，その経験を参考にして和歌山市の街づくりを目ざすことにした。その一つはニュージーランドのクライストチャーチ市である。同市はガーデン・シティとして世界的に有名であり，最近，和歌山市から「花いっぱい運

動指導者」の研修団が派遣された。ここでは，同市フラワーフェスティバル事務局を訪ね，フェスティバルの運営や花を活かした街づくりがどのよう行われているかを調査した。もう一つは米国フロリダ州である。同州は，豊かな自然，とりわけ美しい海岸線と温暖な気候に恵まれ，和歌山県とは姉妹提携関係にある。ここでは，海やビーチを積極的に利用している地域を視察し，それらの魅力の引き出し方や活用方法を調査した。

3．研究会「物流戦略研究会」

物流戦略研究会研究進捗状況

(財)和歌山社会経済研究所
研究部長　糀 谷 昭 治

和歌山を中心とした南近畿地域は、第二阪和道・京奈和自動車道などの道路網、和歌山下津港・関西国際空港の整備が 2010 年～2020 年にかけ順次完成する。このような基盤整備を背景に、本地域への物流拠点形成の可能性を検討し、基本戦略を立案するため、物流戦略研究会を 1999 年度に立ち上げ、鋭意研究を進めているところである。本研究は、1999 年度に 4 回の研究会を持ち、研究体制・研究テーマ・基本的な進め方などを決定した。2000 年度から本格的に研究を進め、2001 年度に総まとめを行ない、基本政略及び具体的な施策を提言する計画である。

研究進捗状況と予定（▲研究会開催予定、◎報告書まとめ完了予定）

研究テーマ	担当	進捗状況	1Q	2Q	3Q	4Q
物流実態調査と将来推計	和大	実態調査完		▲		
陸･海･空物流基盤の現状と整備計画	社経研	ほぼ完了	▲			
近畿全域の物流拠点調査と新設計画	商工会議所	約 70%完		▲		
和歌山地区への物流拠点新設の検討	研究会	自由討論中		▲	▲	▲◎

以上

4．研究会「都市創造戦略研究会」

市民の活力に根ざす都市づくり

和歌山大学経済学部
教　授　大 泉 英 次

平成13年1月25日、和歌山大学経済学部の岩田誠教授に講師をお願いし、研究例会を和歌山大学経済研究所にて開催した。

岩田教授の御報告は、神戸市における震災復興事業にたいする御自身の取材、調査活動のなかから、市民の活力にねざす都市づくりへの課題をひきだし、それが和歌山の都市活性化にとってもつ意義を説かれるものであった。

御報告を受けての討論では、①ぶらくり丁商店街など、和歌山市中心市街地商店街の現状、②商店街活性化にむけて、和歌山大学学生など若者の活力とセンスをどう引き出していくべきか、等について意見交換を行った。和歌山の新しいご当地ソングの紹介など、岩田教授の多彩なお話に触発されて、楽しくかつ有益な研究会となった。

本研究会は現在、様々な講師を招いての勉強会、意見交換の場として運営しているが、しかるべき段階でシンポジウム、フォーラムなどの形で幅広い交流の機会を設けることも検討したい。

5．研究会「観光戦略研究会」

観光戦略研究会について

和歌山大学経済学部
教 授　小 田　 章

本研究会は、和歌山県の観光及び観光産業の発展を目指して、平成 12 年度事業として立ち上げ、３年間にわたり研究するものである。

和歌山県では、観光産業は重要であり、この分野のさらなる発展が望まれている。観光資源だけを見れば、他産業に比べて遜色がない。にもかかわらず、この十数年特別なイベント開催時をのぞき、観光客入り数は増加していない。この要因が奈辺にあるかを分析し、有効な施策を立案することが必要となる。

そこで、本研究会では、まず和歌山市内の観光問題から検討を始めることとし、昨年 11 月には、和歌の浦観光協会、和歌の浦観光旅館組合及び（株）JTB 和歌山支店長をゲストに招き、和歌の浦の現状や和歌山県内の観光事情を伺い、本研究会の研究員と意見交換を行った。和歌の浦は、古く万葉の時代から和歌の題材として詠まれたように由緒ある名跡である。しかし、今はその面影も薄れてきている。我々は、和歌の浦再活性化プランを検討し、県内外の多くの人々が訪れるような観光スポットにする策を検討しようとするものである。

和歌山県の観光資源は、一つ一つ見れば、非常におもしろく興味深いものである。しかし、現在はスポット的に一つの資源を売り込むだけでは十分な集客要因とはならない。必要なことは、それらをネットワーク化し、点としてではなく面として観光資源を再構築することである。そのためには、県内の観光関連業者の方々はもとより行政や経済団体等が協力し合うことが肝要となる。

こうした基本的方針に基づいて、本研究会は今後２年間にわたり和歌の浦地域と和歌山県全体の観光産業の活性化の可能性を探っていくこととする。

平 成 13 年 度 事 業 計 画

1．研究事業

＜自主研究＞

和歌山地域における IT 活用による社会生活向上の可能性について

＜継続研究＞

1：物流戦略研究会

2：都市創造戦略研究会

3：観光戦略研究会

2．その他

ホームページを通じる広報活動

研　究　成　果　一　覧

○平成９年度

No.1：提言　**紀淡連絡道路を実現し和歌山地域の活性化をはかるためのグランドデザイン**
（和歌山商工会議所　受託研究）

提言　このチャンスを活かそう　紀淡連絡道路を実現し和歌山地域の活性化
（グランドデザイン概要版）

No.2：和歌山地域産業の市場構造

No.3：ニーズの多様化と規制緩和の進展に伴う経営戦略
－和歌山企業の活性化を目指して－

○平成10年度

No.4：和歌山市民・近隣地域住民の消費動向と和歌山市小売商業の課題

No.5：和歌山市の高次都市機能

No.6：和歌山県における産業構造の変化と雇用動向

和歌山地域経済研究機構　理事会メンバー

（平成13年4月1日現在）

【理事会】

理事長	小田　章	和歌山大学経済学部	教授
理事	松田　忠之	和歌山大学経済計測研究所	所長
理事	山田　良次	和歌山大学経済研究所	理事長
理事	中村　脇二	和歌山社会経済研究所	専務理事
理事	﨑山　頌一	和歌山社会経済研究所	研究部長
理事	尾﨑　武久	和歌山商工会議所	専務理事
理事	坂口　慶直	和歌山商工会議所	事務局長
名誉顧問	佐武　廸生	和歌山商工会議所	前専務理事
理事長代行	竹内　昭浩	和歌山大学経済学部	教授